

ISSN 2759-5404

OMNIA VINCIMVS FRVCTV INTER FOLIVM VERO!

もっと源流へ、  
もっと本質へ！

哲学文化塾機関誌「フィロカルチャー」略して改め

# フィロカル

13号  
Autumn  
2024

◎特集 死



## ～死んでも踊れ！～



Dance Granting Vixeris!

樋笠勝士 谷宏之 今道友昭 ヤナギダ・カツミ たぬ屋 みむらりえ 綺蝶レナ 伊藤博章 濱賢

VOL. XIII



# Contents

小特集 死

—死んでも踊れ！—  
Dance Granting Vixeris!

\* 第12回「わが哲学を語る」を語り継ぐために 精神のエクスタシス 伊藤博章 03  
— 灵魂の不死と美的体験 —

\* 生の美学 —「死とは何か」の邀及哲学史 — 樋笠勝士 07

気付けばそこに、高密度 たぬ屋 16  
極楽浄土への入口 熊野妙法山 谷宏之 12

\* 第7回 講座アーハウス テレポテーション ヤナギ・ダカツミ 18

\* ニセモノの心理学『食』 今道友昭 20

\* 場末のビジュアル哲学 その1『妖、妖怪ってなんなんだ』 綺蝶レナ 23

\* ムネーモシュニーの会と雑誌『ムネーモシュニー』

詩人水原昇 中編 みむらりえ 26

\* 世にも不思議な死語の世界 濱賢 30

\* 第13回 美は輝きた 般若 —鬼がつなぐ東西の教え— 濱賢 31

\* フィロカル (説名) 語義講釈:「フィロ-」はギリシャ語の「フィロー(愛する, 好む)」, 「-カル」はカタカナ日本語「カルチャー」の略。造語的にはフィロソフィー(質さを好む)やフィロロジー(言葉を好む)のように、ギリシャ語由来の語同士(同じ言語同士)を組み合わせるのが筋である。cultureはラテン語 colo(耕す, 手入れする, 飾る, 尊重する)の受動の完了分詞 cultus(耕された, 手入れされた, 洗練された, 上品な)由来の言葉。したがって、フィロカルチャー略してフィロカル(洗練されたものを好む)はギリシャ語とラテン語という異なる言語の組み合わせなので、少々インチキでもある。語学的、形式的造語視点から大雑把にいえば、フィロ+目的語が建前で、目的語が母音またはhから始まる場合に限り、フィル+目的語となる。例えば、philanthropy(フィランソロピー(博愛, 人好き)), philharmony(フィルハーモニー(交響楽団, 和音好き)), philhellene(フィルヘレーネ(ギリシャ好き))など。要するに、母音の連続や子音続きという不細工さを回避している。これが「フィロソフィー」や「フィルカルチャー」とはならない理由である。ということで今後とも『フィロカル』をよろしくお願い申し上げる次第である。



死んでも踊れ！

第12回 今道友信メモリアル

「わが哲学を語る」を語り継ぐために

精神のエクスタシス——靈魂の不死と美的体験——文・伊藤博章

日本美容専門学校講師

死と存在と同一性  
今道の「死の思想」は、思弁的・超越的形而上學の論考を展開する『同一性の自己塑性』において論じられる。

死が超越的形而上學の論題となるとき、経験的現実である死の現象ではなく、死の彼方、つまり彼岸的現実が追究される。つまり、死を論じることは死を介しての不死を論じることになる。

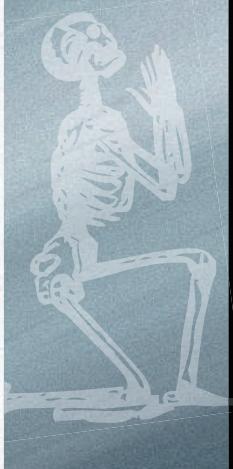
質的同一性は等しい性質を持つことを意味する。例えば、この柴犬とあの秋田犬は日本犬という点において質的同一性を有しているが、数的同一性においては、つまり個体としては異なる。

ところが、今道は同一性を「或ること」に関しても若干のものが同一であるといふ事象」(46ページ)。『同一性の自己塑性』からの引用はページ番号のみを記す)と捉える。

この定義によると、数的同一性と質的同一性は区別されない。さらにこの定義による限り、「『である』とか『でない』とかいふ繊辭的表現は主述間の何らかの同一関係の成立の有無を含意する」(64ページ)のであるから、AはBである

るという判断にも  $A = B$  という同一性が認められることになる。このような同一性の概念に基づくのが今道の同一性の哲学である。

そして、同一性の概念は経験的現実を超えて、さらに超越的現実にも適用される。旧約聖書で「在りて在るもの」(出エジプト記3・14節)と呼ばれる神は、中世の哲学者トマス・アクィナスにより ipsum esse (それ自体なる存在) と呼ばれた。今道はこの伝統に沿い、神を存在そのものと捉える。そして「存在そのもの」は「常に存在の充足であるもの」であり、「決して変化しないといふこと」であり、「変化が全く考へられない」のであるから「絶対的同一性といふ事象で



ある」と(53ページ)と繰り返す。

この絶対的同一性が原同一性であり、神は原同一性と定義される。こうして同一性の哲学は同一性の超越的形而上学になる（なお、今道はかなり自由に、存在を存在そのものと同義で用いることが多い。同様に原同一性も同一性と表す場合が多い）。

原同一性は絶対的超越者を指すか相対的存  
在者はこの原同一性の「自己贈与」(53ページ)に  
より成立するとされる。(つまり、超越者が原同  
一性であるのに対し、相対的存者たる者は分有的同  
一性として成り立つ。この場合の分有はプラト  
ンの「イデアの分有」に由来するであろうが、す

でにトマス・アクィナスは *esse* (存在) の分有を論じており、それに倣つて、今道は同一性の分有を論じている。

あらゆる存在者は存在する限りにおいて原同  
一性の自己贈与により存在するのであるから、  
人間の存在も同一性の自己贈与による。しかし  
人間は単なる存在者ではなく、理性的存在者で  
ある。そして「人間の理性は存在の自己開示の  
次元として、理性に於いてのみ存在は自己を語  
る」(188ページ)とされる。

存在の自己開示とは理性(理性的思考)において存在そのものが明らかになることを意味する。人間には原同一性(存在そのもの)の自己贈与と自己開示があることになる。

同一性の自己贈与と自己開示に加え、理性的存在である人間においてはさらに同一性の自己

伝達がなされぬ。この自己伝達が「死」を意味する。自己伝達といつて叫葉ばねるひへやインのカトリック神学がカール・トーナーの「神の自己伝達〔ゼルブ・セントラル・ミッション・コットバースト〕」を参考にしたと思われる。

神の自己伝達はキリスト教の教義や新約聖書の内容を理解するための概念であり、恩恵論に関係するものである。今道はその自己伝達という言葉を死を説明する形而上学的概念として用いる。今道は自己伝達を論じる文脈でグラティア（恩寵）やカリタス（愛）という神学的な用語に言及するが、そこに神学概念の自己伝達が持つ意味の反映が読み取れる。

## 精神のエクスタシス この同一性の自己伝達という概念を用いて

精神のエクスタシス

この同一性の自己伝達という概念を用いて、精神のエクスタシスが語られるが、これについて次のように述べられている。

原同性の自己伝達とは、人間の精神が原同性のようない完全な同一性を持つことを意味する。そして精神が完全な同一性を持つことは、変化・流入・流出するものを全く持たないことで、あるから、精神が肉体や感覚から完全に離脱・解脱することになる。

エクスタシスとは、(外へ) stasis(立つ)ことであり、離脱・解脱を意味するが、「完全なるエクスタシスの成就」が「人間的自己の生命の永遠化」とされるのは、変化がありえないからであろう。同一性の自己伝達により死を介しての不死が成り立つ。つまり、死により精神は不死に至るのであるから、「存在そのものの恩寵である」(44ページ)「死はそのやうにして存在が人に贈るカリタスにほかならない」(45ページ)と今道は言つ。

自己伝達において人間の不完全な同一性は完全なる同一性へと至るが、このことを、今道は完全なる原同一性の自己回復を意味すると考へる。

る。それゆえ、今道は「死に於いて部分的にではあるが、絶対的同一性が宇宙の不完全同一性を修復することに歩みを進めてゐることは確かである。……一者のみしかなかつた同一性の純粋状態に復するといふ意味で、同一性の自己回復としての自己還帰が成立する」(49ページ)と述べる。

死という同一性の自己伝達は、同一性の自己回復であり、それは純粋状態への同一性の自己還帰であるとされている。一者という概念を用いており、ネオプラトニズム的な世界観を彷彿させるような叙述である。同一性の自己還帰といふ形而上学的世界観を背景に、死を介しての不死は考えられている。

### 形而上学的不死の限界

このような同一性の形而上学において論じられる死を介しての不死の思想は、現代の知的世界を生きる者には空疎に思え、受け入れるのは困難である。

現代の知の枠組みは、実証科学が考察する経験的現実の領域を超えた現実を含まない。超越的な領域の存在 자체を否定する存在論的自然主義の立場か、もしくは存在するにしても科学的方法においてはアクセスできないとする方法論的自然主義の立場か、いずれにせよ、自然主義が知のデフォルトの立場である。

科学革命(17世紀)と啓蒙主義(18世紀)以降の知の世界は形而上学を駆逐する実証的自然主義

の成果を誇示している。もし超越的現実を認めることにしても、「信に場をえさせるために知を廢棄<sup>アブダクション</sup>しなければならなかつた」(純粹理性批判)三・19)とカントが述べたように、経験的現実を超えた領域への知的アプローチは否定してきた。

ポスト形而上学といわれる現代において概念による思弁的形而上学を実行する限り、その認識論的正当性を論じることが求められる。少なくとも、死後の精神のエクスタシスを述べる限りは、実体的心身二元論を否定する精緻な論考に対する反論を明確にしない限り、「機械の中の幽靈」(テカルト的)三元論を批判したギルバート・ライルの言葉<sup>テカルト</sup>として拒絶されるだけであろう。

今道が形而上学の認識論的正当性についてどのように論考を行つてゐるのか、定かにできない。ここでは今道の思弁的形而上学は可能であるとする立場を受け入れ、今道の死の思想を述べるが、そのとき、やはり疑問がある。死が力リタスであり、恩寵であるとされるが、死の現実を考えるとき、これを受け入れることができるだろうか。

このことは今道自身も問題にしている。

「しかし、死は果たしてカリタス——グラティア——恩寵であらうか。死こそは苦しみであり、引き裂くことであり、悲劇であり、まがつみではないか。……まことに、死は恐怖すべきものではないか。自己の死は自己にとつてはやはり恐怖や忌まはしきものであり、他人の死もまた

その人が自己に近ければ近いほど、悲しみであ

り忌まはしきものではないか」(45、46ページ)と今道が言うとき、説得力がある。

しかし、今道はそれを理由に自らの死の思想を否定することはない。今道は死の悲劇性・忌避性は認めて、その淵源を他に求める。「死が本当に悲劇的なもの忌むべきものであるとしても、もともと同一性が回復せられなくてはならないやうな事態にこそ、その悲劇の淵源はあり、忌まはしさの原因もあるのでなければならぬ」(46ページ)と語つ。

このように述べると同時に「原初から我々人類が悲劇に位置してゐたのかどうか、それは今、我々がここで問ふべき課題ではない」(46ページ)として、死の思想においては、死の悲劇性の問いは留保され、詳しく述べられない。今道の死の思想において「悲劇的なもの忌むべきもの」の影は払拭されている。このことは、死とともに美が論じられるところからも明らかになる。

### 死と美

『同一性の自己塑性』は美的形而上学(カロノロジー)の書であり、美が中心テーマである。美の論考においては、同一性が判断の主述間の同一関係として、判断論において論究される。そして、超経験的現実である死のエクスタシスと経験的現実である美的体験のエクスタシスが関連付けられることになる。

美的体験とは小さき死である。睡みは死の

小さき神秘と言はれるが、人間の美意識こそ小さい死の体験である。それゆゑにこそ、その知的表現結晶としての美的判断自体も死による原同一性との一致に最も相似した純度高き同一性としてのエクセスタンスなのであつた。死が同一性の自己伝達であつたとすれば、小さき死としての美体験は同一性の小さき自己伝達として同一性の自己暗示でなければならぬ。死が存在の恩寵であつたのと同じ意味方位に於いて美体験もまた存在の恩寵であることは確かであらう。それは死による不死の演習としての精神の自由飛翔のための修練を行ふ修道院である。

(93, 94ページ)

今道が「死は恩寵である」とする思想は、「小さい死の体験」としての美意識といふ現実経験に基づいているようである。自己伝達(超経験的現実)と自己暗示(現実体験)の関係は、ヤスパースの「超越者」と「暗号」の関係を想起させる。「死による不死の演習」とは、プラトンの魂の不死を論じる『バイドン』で語られた、哲学は「死の練習」である、といふ思想に倣うものであろう。

「美的体験の深い静けさを味はぶならば、そこに死の法悦の影が映つるのを感じとるかも知れない」(94ページ)とも今道は言つが、そこに死が悲劇的で忌まわしいものだという認識はない。『バイドン』ではソクラテスの死にゆく姿がプラトンにより語られている。

(いとう・ひろあき 優理学)

「棚上げ」された死の悲劇性と忌避性 西洋の精神世界はソクラテスとキリストの二人の死の影響を受けているという。二人の死は、どちらも刑死であるが、その姿は対象的である。キリストの十字架の死の苦しみに比して、ソクラテスを毒杯を仰ぐとき、「杯を口にあて、じつになんのこだわりもなしに、やすやすと飲みほされたのです」(二七〇)、『プラトーン全集』岩波書店、一九七五年)とプラトーンは述べる。

今道はキリスト教徒であるが、哲学者・形而上学者として死の思想を語るとき、その死はプラトンが語る死に近いようである。それが、死の持つ悲劇性や忌避性が「棚上げ」された所以でもある。

今道が最晩年に書いた『超越の指標』は形而上學ではなく宗教哲学の本といえる。そこでは、宗教は「人間にとっての最大の郷愁」(38ページ)と言われ、また「死と郷愁」と題する文章があり「死を通してでなければ……郷愁が満たされることはない」(39ページ)と言われている。

宗教哲学を論じるとき今道は、形而上學の「同一性の自己還帰」を述べることではなく、「郷愁」という還帰への希望を語る。

『超越の指標』において予告された「同一性の自己塑性」の続編となる『差異性の自己展開』は書かれることはなかった。死にに関する棚上げされた問題を含め、形而上學は宗教哲学に場をえさせ、廃棄されたのだろうか。

今道友信(いまみちとものぶ) 東京大学名誉教授、清泉女子大学名誉博士、日本アスペン研究所特別顧問、日本美容専門学校名誉校長。  
◎略歴  
1922年-2012年。東京生まれ、東京大学文学部哲学科卒業、パリ大学(研究員)、ヴュルツブルク大学非常勤講師、九州大学助教授、東京大学教授、国際美学会副会長、哲学美学比較研究国際センター所長、放送大学教授、清泉女子大学教授、副学長、紫綬褒章受賞、勲三等旭日中綬章受賞、第25回マルコ・ボーロ賞受賞、第19回和辻哲郎文化賞受賞。



『超越への指標』(今道友信著、ピナクル出版、2008年)、『今道友信 わが哲学を語る』(今道友信著、佐藤孝雄・池田雅之編、まくら春秋社、2010年)。

# 生の美学

## —「死とは何か」の溯及哲学史—

文・樋笠勝士

岡山県立大学特命研究員

### 序 「死とは何か」の問い合わせ

「死とは何か」という問いは成り立つだろうか。これについて、20世紀の哲学者V・ジャンケレヴィッヂは「死」とは「無」であるから問いは成り立たないという視点を示す『死』。なぜなら「無を考える」(=「何も考えていない」というのは無意味だからである。

とりわけ、出来事や数値として表され科学的客観的に「知る」ことができる「他人の死・三人称の死」や、愛する相手を失うことで主体が揺るがされる極度の情感的な体験として「知る」ことができる「親密な人の死・二人称の死」と異なって、彼の強調する「私の死・一人称の死」は、当事者の「私」にとっては観察することもできず、死の体験もあるのかどうかも分からず、

そもそも対象化して「知る」ことができないと

ころの「無」でしかない以上、「死とは何か」の問いは原理的に不可能であることになる。

とはいって、形而上学は、少なくとも思念上の存在もある種の存在性格を持つものとして「無」の客観的な議論を許容し、その定義や説明に努めてきたし、美学においても武士道やG・バタ

イユなどで「死」を一定の仕方で美学化し、美意識を論じる場合もあつた。もちろん学を離れて日常生活から見れば、*memento mori*の言葉

が、一方で刹那的な生き方を勧め(*carpe diem*)、他方では予測不可能な死に對して警告してきたように、「死」が深刻且つ恐るべき人間的有限性として問わざるをえないことを否定する人はいないであろう。

### 第一節 現代思想と「私の死」

時代を特徴付ける仕方で溯及史的に問いたい。

なぜなら、まずもつて我々が関心を持つのは現代的な「死」の有限性にあるからであり、それを問う哲学を出発点とするることは自然であると思われるし、また遷及史的に捉えることによって新たに見えてくるとも期待されるであろうからである。

哲学史は批判史であり、現代の思想は過去の思想への批判によつて成り立つてゐる。批判することで新たな視点が生み出され、新たな思想や理論構築へと進んでいくのである。例えば、歴史的に顧みられなかつた「身体」を主題にして一元論的に思索する現代のM・メルロ・ポンティも、デカルト的心身(三元論)を批判すること

で自らの身体論を構築していったのである。

現代思想が批判史的な視点で成り立っているとするならば、前記の「一人称の死」の考え方もまた同様に、歴史的に顧みられなかつた「一人称」の視点を主題にしたことから生まれたものであると言つてよいであろう。

確かに「一人称・私」という哲学的的主題の出現は、実存主義の登場を待たなければならなかつたと言える。これが20世紀になって初めて出された主題なのであれば、「一人称・私」の概念は20世紀的な人間には思索するには必要不可欠な概念であったのだろうと考えることもできる。

そのように考へるならば、ハイデガーもまた同様に「存在」を問うときに、伝統的形而上學の俯瞰的視点を批判したからこそ、「存在」の意味を知る人間存在の側（現存在）から「存在」を問うていく道筋を作れたのだと言うことができよう（『存在と時間』）。

そのおかげで、人間存在が、自己よりも他者や社会への配慮と埋没のゆえに自己を見失つて生きる頽落した日常生活から脱して、ほかの誰でもないこの「私・自己」を取り戻す決意や覚悟の生への方向転換の可能性が示されたのである。

換言すれば、人間存在の事實性と有限性を最もよく表す「私の死」を軽視し、回避し、逃れ

ようとする非本来的な生から、「私の死」を正面から見据え、心構えて自己を捉え直す本来的な生へと勧奨し、死に対する新たな生のあり方（死に向かう存在の可能性を問つものであつた。ところで、ハイデガーが与えた「私の死」の絶対的特權性が、後続するサルトルによつて批判された（『存在と無』）。

「私」や「自我」を実体的にではなく、意識として考察するサルトルは「死」と「有限性」を同一視するハイデガーを批判した。彼は、前者については「誕生」と同じく偶然的で予測できず、「私」の自由や期待や力の及ばない事実であるとし、他方、後者は生きている人間存在に属するものであるとして、「対自存在（自由且つ可能性に満ちた自己投企する有限なる反省意識）」と呼ぶ。「死」は決して「対自存在」の有限性の根拠ではないのである。

このときサルトルは、ハイデガーが「私の死」を「私の生」の枠内に組み込み、その末端に位置付けたのに対し、「私の死」から切り離された「私の生」の意識の状況を論じている。生きている有限な「対自存在」は「私の死」に対しこのような生の態度もとれず、生の態度が真正であるか否かも問うことはできない。「私の死」とは、偶然的な「事實性」を示すのみであり、「対自存在」にとつては「私の生」とは無縁なる「他者」となるのである。

そもそも現代哲学は近代哲学を批判したところから始まつたはずである。その批判はショーペンハウアーやニーチェなど生の哲学から実存主義へと流れる道筋を作つてゐるが、それらはおよそ近代哲学的な理性に基づく人間理解が、個人よりも公共を、主觀性よりも客觀性を、個性よりも社会規範を、身体よりも精神を、不合理の許容よりも合理性への執着を、現実的な感覚的生活よりも理念的な精神的活動を価値付けてきたことへの批判であつたと言つてよい。

しかし、その近代的理性の批判によつて得られた新たな見知として、個や感性や身体への反省が現れたとしても、少なくとも「死」に関する問いには限界があることも明らかである。なぜなら、ジャンケレヴィッチが言つよう、一人称を例外としたときにのみ「死とは何か」を論じることができるからである。

現代哲学は、一人称への視座を典型として、「死」における孤独性、事實性、主体性を重んじる。

その結果、その問いは、「死とは何か」という直接的な問ひではなく、「死に対しても人はどのような態度をとるのか」という現実的な生の対処方法となる間接的な問ひへ、あるいは「死」を「生」の外側に置くことによってむしろ「生」の方を問う方向へと転位しているのである。

## 第一節 「理性の時代」の「死」

西洋近代哲学は人間的理性を称揚する。

中世キリスト教哲学の「神の時代」から「理性の時代」へと歴史は動き、西洋近代は合理的思考の自由を得たのである。

人間に平等に配られている理性は、数学的論理の確実性を範としながら、公共的且つ普遍的な能力として、その使い方が人々の啓蒙に役立てられて行く(テカルト『方法序説』)。

近代的理性はまず心身の二元的区別の視点の下に「死」を考える。諸部分を持ち、空間を占める「延長」とされる身体は、「死」の際には機械的運動の諸器官の変容により滅びるが、空間を占めない精神にはそのよくなことは起こらず、身体から「離れる」のである(テカルト『情念論』)。

心身二元論では、心身の関係について整合的に説明することは困難であったが、それでも「死とは何か」に応える姿勢はある。

「死」が心身の分離であると定義するならば、物質である身体の崩壊後、身体は物質一般に浸透・解消してしまうが、精神の方は死後も存続するという思念が成り立つ。これは中世キリスト教思想の「魂の不死」の問題と重なってしまふが、その信念をテカルトは語るのみである。

他方、スピノザはかかる「魂の不死」の議論がある。そしてこれらモナドの表象と物体の運

には与しないし、そもそも「死」の問題を哲学体系から排除している。彼は「自由な人間は死を考えない」(『エチカ』)と言うのである。

何者かが存続する(生きる)、あるいは存続せず終了する(死ぬ)といった時間的認識の下で生きる人間と違つて、自由な人間は永遠的な理性的精神の認識に従つて生きる賢者の人間である。これは「永遠のまなざしの下の認識」の立場に立つ理性的精神であり、その認識のうちにには身体の本質も含まれ、またその精神は神の内に含まれている。このような精神は永遠なのである。

他方、過去・現在・未来を持つ時間の持続の下で現実的な精神と現実的な身体とを精神が認識する限りは、これら的心身は時間的で個体的な「(自己)以外のものに依拠する」様態に過ぎない以上、精神が持続している限り身体が持続する、と言うほかないのである。こうして「魂の不死」は問題にならないものの「精神の永遠」は明確に価値付けられているのである。

さて、カントは、理性の限界を表す「証明不可能な問題として「神」と「自由」に加えて「魂の不死」を挙げる。これを、彼は論理においてではなく道徳的心情において確実なものであるとした(『純粹理性批判』)。それは純粹理性が捉えるものではなく、実践理性が要請するものであり、より善い世界が存在するという信念を基礎付ける目的性を持つ。

したがつて「魂の不死」や「来世への希望」は、神学的問題ではなく、現世において人間に道徳性を発現させる働きを持つという実践的問題となるのである。こうしてカントは人間の生のあり方として「魂の不死」を理性の外に合理性的に位置付けたのであった。

死を遠ざけるのではなく、死に耐えて死の中

動は完全に調和しているのである。

このような予定調和の世界観は「誕生」や「死」という経験的分節点を問題にしない。自然界では生まれ死ぬといったことがなく、ただ変容があるのである(『自然と恩寵の原理』)。自然界の中では高い次元に位置する人間精神も神の御業の表象であるから、神を摸倣し、創造活動へと進む(『形而上学序説』)。

キリスト教神学の伝統に基づく「魂の不死」を考える余地も彼にはあつたとはい、思索の枢要は神の被造物の美的調和とその称揚といつ弁神論的普遍思想にある。

さて、カントは、理性の限界を表す「証明不可能な問題として「神」と「自由」に加えて「魂の不死」を挙げる。これを、彼は論理においてではなく道徳的心情において確実なものであるとした(『純粹理性批判』)。それは純粹理性が捉えるものではなく、実践理性が要請するものであり、より善い世界が存在するという信念を基礎付ける目的性を持つ。

に自分を留める生こそ精神の生であると言つた

のはヘーゲルである（『精神現象学』）。「万物が精神であり、精神は万物である」とする唯心論においては、「死」もまた精神のあり方に含まれて思索されるのみならず、そもそも「死」は自然界や人間の自己超越にとつて必要不可欠のものである。

存在と歴史の根柢にはいかなる不合理も不正もないとする彼の立場から見れば、「死」は魂の不死の伝統的問題を惹起することもなく、ましてや悲惨と絶望の現実の生が問題となることもない。その思索は、矛盾し衝突するもの同士を和解させ、現実の混乱や悲惨を徹底して理性にかなうものにしてゆく理性化の歴史哲学となる。

近代的な公共的理性の関心は、「死」ではなく「不死」や永遠性、それを洞察する理性自身にある。そこでは、現代思想のような絶対的孤独の中で事実として「死」に向き合わざるをえないような閉塞した思索ではなく、理性に対する絶大な信頼の下に「死」と「不死」を合理化しつつ、同時に神的存在への強い思慕が感じ取れる思索が見いだされるのである。

を真剣に論じた時代であった。

輪廻転生や「魂の不死」の思想はオルフェウス教からピタゴラス、プラトンへの流れを作つていたのであるが、その中でプラトンは「死とは何か」の問い合わせに正面から応えている。

そのプラトンは、おそらく師ソクラテスの死刑宣告と師の言葉、「神が存在する以上、善い人には悪いことは何も起こらないはずである。

生きてても死んでからも」（『ソクラテスの弁明』）に触発され、「魂の不死」の思想へと進み、死は生よりも善いものであると考へるに至つたのである（『ペイダン』『ペイドロス』）。ここでは、「死」とは神的な魂を牢獄の肉体から解放することである。死の際には肉体のみが滅び、魂は死ぬことなく生き続けるのである。

このように魂が不死であるとする（*πειθεῖσθαι*）ならば、哲学者は、神的イデアを觀照して眞の知識を獲得するため、まだ生きている間でさえ可能な限り神的な魂を肉体から解放する「死の練習」を行おうとすることになる。

これは哲学者にとっては人生の目的であり、ほかの何にも代え難い、切望すべき理想的な活動である。この活動は「エロース」と呼ばれ、眞の知識（イデア）への激しい恋心として正しく「哲学（知恵への愛）」と呼ばれる。

リストテレスはプラトンの「魂の不死」説や輪

廻転生の思想は神話であるとして退け、魂につ

いては肉体から離れることなく、一体的に働く現実的な力と考えたが、それでも人間的魂の中に、ある知性に不死性を見いだしていた（『魂論』）。

知性は神的知性であり、それに従う生は神的生であり、不死なるものに与る生であり、最も幸福な生なのである。

ここでもいったんは心身の区別をした上で、心身一体化の主張があり、そこからさらに人間の中に神的なものを見いだし、その永続・不死への道を考える理想主義的な思索がある。

歴史が古典的ボリス社会から帝国的な社会のヘニズムへと進むと、人間は普遍的な理想主義の立場ではなく、個人的に現実的に生きる立場に立つことを余儀なくされてしまう。

そこで死に際して肉体だけでなく、魂や知性もすべて滅びるという唯物論的なエピクロス思想が現れた。実際、生活経験的には人間的魂は死や来世に対して恐怖心を持つ。これが心の平安を阻む。だから彼は言つ。生きていれば感覚できるが、死には感覚や苦痛や恐怖がない、生と死は同居できない、死は人間にとつて何ものでもない、と。

原子論者且つ物活論者は、生きている間の様々な憂いや不安、恐怖心から人間を救済しようとしているのである。

救済と慰めと諦めを基盤とするヘニズム哲

理性の時代に先立つ古典時代は「魂の不死」

### 第三節 「古典時代」の「死」

学は、荒れ狂う世を超克する理性的且つ諦念的な態度として、アパティア（感情を抑制する理性的な態度、*μηδική απάτη* 「何にも驚かない冷静な姿勢）を貫く賢者の境位を情熱的に追究するストア派の哲学を生み出した。

この理想の生を「一者・神へのエロース」として永遠のまなざしの下に見る哲学を展開させたのがプロティノスであり、そこではいわゆる「死」は全く問題にはならなかつたのである（「エネア（テス）」）。

聖書思想を担うキリスト教哲学は基本的にはプラトン的なエロースの理想主義を信仰の内面性の基盤とする。

「死」の問題は単に人間が生き物としての生死の問題で終わるのではなく、内面性のあり方に基づいた問題となる。生き物として生きている人間でも死んでいる者はいるし（肉的な人間）、生き物としての死後もまた生きる（靈的な人間）もある。いわゆる「死」は決して「生の強奪」ではなく、むしろ新たな生をもたらす契機となるのである。

神への回帰となる「死」に向けられた「生」を、教父アウグスティヌスは「神の美」を求める続けた眞の生としている（「告白」）。ここには日常的な生死の事実的経験的分節を越えた大いなる視野に基づく思索、ひたすら神的存在を目指して飛翔するエロースがあるのである。

### 結語 「死」と「生の美学」

西洋現代思想は死の事実性と個人性を重んじる。その限りで個々の人間は不可避な死の事実

的現実に個人で対処するしかなく、それに対する救済も慰めもないまま、人間の孤独な生が露わにされ、そして放置されている。

これに對して近代思想は、万人が等しく所有し、その内実を分かち合うことのできる人間的理性に基づいて死を合理化・客觀化・公共化することに専心している。その基礎となる要素の基準は心身の区別の上での人間精神・理性の価値付けにあり、この精神的価値に裏打ちされた死の克服（魂の不死論、理性的な認識、超越的な秩序観）を目指している。

こうして事実的現実の冷徹な指摘から冷静な合理性化や秩序化へと進む歴史的過程の下で西洋古典思想を見るとき、人間的境位を超越して飛翔すべき大いなるものへの強い憧憬（*エロース*）の思索へと展開していくことが分かる。

つまり遡及史を素描すれば、絶対的な私的孤独の自我精神（個体の価値）から客觀的な公共的精神（共同主觀の価値）へ、そこから神的存在とエロース的精神（宗教的な超越の価値）へと視点が展開していると言えるのである。

とはいって、哲学史を進歩史ではなく、個性的

作品史として見るならば、自我精神も公共的精神もエロース的精神も、人間の生にとつてはどちらも真偽の別や取捨選択が問われるものではなく、生を生き抜くためには、まさしく必要な視点となるのではないだろうか。

「死とは何か」の問いは、それが可能であるとしても、死に対してどのような生の態度をとるのかの次なる問い合わせ避けられない。「死とは何か」の問いは常に「生とは何か」の問いを導くのである。

ショーベンハウアーに始まる「生の哲学」という哲学史的な括りがあるが、これらには現実的な「生・人生・生命」を慈しむ視座がある。序で触れたバタイユもエロティシズムを問う「死に至るまで生を讃美する」と述べたし、*memento mori* もまた死の警告ではなくて「生」を慈しむことなのである。

古典哲学は「不死」としての「生」、あるいは「眞の生」を称賛するが、称賛とは「美しい」といふ経験そのものである。

こうして哲学が「死」の問題から新たに「生」とは何かを問う、その美的価値を問う学を提案するならば、それを「生の美学」と呼ぶことになるであろう。（ひかさ・かつし 美学、哲学）

# 極楽浄土への入口

# 熊野妙法山

熊野妙法山阿彌陀寺山主

谷 宏之

## 序文

奈良時代（西暦七〇〇年代）以前より熊野は「神々の国」「死者の国」でした。現代の和歌山県と三重県の南部、東西南北四つの牟婁郡を熊野と呼びます。たくさんの神々が宿り、その神々は仏教が興隆した時代の神仏習合いわゆる本地垂迹説により権現と呼ばれました。そして死者の魂が集まる場所でもありました。

平安時代後期になると、阿弥陀如来の西方浄土思想が広まり、さらに鎌倉時代になると、一遍上人をはじめとする浄土系の念仏行が盛んになります。その頃から熊野は西方浄土（極楽浄土）への入り口といわれ、亡者は必ず熊野からあの世へ旅立つてゆくと信じられるようになります。その熊野でも亡者が最後に極楽浄土へ旅立つてゆく場所が妙法山なのです。

中世に描かれた『那智參詣曼荼羅』（次頁下段コラム参照）には補陀落渡海で有名な補陀落山寺から各王子を巡り那智山に達する道程が描かれており、そこには山伏に連れられた白装束の二人が各所に描かれています。そして那智の滝、那智神社の上部、日、月が描かれた最上部に妙法山があります。そこでは山伏だけが合掌して座っています。つまり、連れられた白装束の二人は亡者で、熊野詣をしたあと、最後に妙法山から

あの世へ旅立つていったのです。これを亡者の熊野詣といいます。この『那智參詣曼荼羅』は主に熊野比丘尼という尼たちが全国に勧進（資金集め）を行ったときに繪解きとして使用したもので、その繪解きに聞き入った各地の人々は、亡き親族とその白装束の二人を重ね合わせて感涙にむせび、手を合わせたことでしょう。ここでは、その熊野妙法山阿彌陀寺について簡単に沿革とお髪上げという風習、また熊野詣の御利益とは何なのかということについて私見も含みますが述べていきたいと思います。



写真①：御影供お達夜の行道は死者信仰の山寺のイメージ（2024/04/20撮影）。

## 沿革

妙法山の信仰の歴史は奈良時代に遡り、熊野にあこがれた優婆塞（出家をしない在宅として仏道の修行をする者）や山岳信仰の行者・修験者たちが那智の滝にたどり着いた後に修行の場としてこの山を選んだことに始まるとしています。

平安時代に入ると法華經に帰依した持経者（読経を行とする者）たちが庵を結んで修行するようになり、平安末期に編纂された『本朝法華驗記』にある奈智山の応照（應照）法師が自らの身体を燃やして仏に供養したという遺跡が応照上人火生三昧跡として今も山内に残されています。

鎌倉中期（一二六〇年頃）には臨濟宗の大立者である法燈（法燈）国師が入山して伽藍を構築、本尊を阿彌陀如来とする阿彌陀寺を建立しました。法燈国師は臨濟宗法燈派の本山であった和歌山県田良の興國寺を開山しましたが、高野山で密教を学び、六年間の入山の後に高野金剛三昧院の住職にもなっています。興國寺に住みながら熊野にも心を寄せ、密教を根本に念佛行を融和させて、妙法山を西方極楽浄土への入り口と位置付けたのです。

江戸時代に入ると紀州徳川家初代頼宣公の庇護を受け、寛永年間（一六三〇年頃）頼宣公が遣わした海義和尚のもと、本堂の移転や境内の整備が進められ、以来紀州徳川家の祈願所として代々の藩主を祀る御祖堂も設けられていました。

また、那智の七本願寺の一つとして配下に修験者、念佛聖、熊野比丘尼などを従え、全国に展開した那智山造営のための資金勧進の一翼を担っていました。

元来那智山という山ではなく、宗教上の「山」であり、古くは奈智といい、那智の滝を中心とする一帯をそう呼んでいました。那智の滝を取り囲むように那智三峰と呼ばれる光ヶ峰、烏帽子山、妙法山があり、現在、那智山と呼ばれる那智大社、青岸渡寺がある場所は正確には妙法山の北面中腹に位置します。

阿彌陀寺は現在、京都仁和寺を總本山とする真言宗御室派に属しています。妙法山の北面中腹に位置します。

## 妙法山のお髪上げとひとつ鐘

今から九〇〇年前の平安時代後期、蟻（あり）の熊野詣といわれたほど盛んだった熊野への参詣者たちが、自らの分身である頭髪を納めて、来世での極楽往生を願つたのが妙法山のお髪上げの始まりです。

その後、鎌倉時代中期（約七〇〇年程前）に入つて、人々は親族が亡くなつたとき、その遺髪を妙法山に納めるようになりました。この風習が今も熊野地方の人々の間で伝承を続けています。

と受け継がれています。

現在では火葬にしますので、喉仏と一緒にいわれる遺骨を、小さな分骨箱に入れて納めに来られることが多くなりました。

遺髪、遺骨は境内にある納骨堂の床下にある納骨室に納められ、やがて土となり妙法の山に帰つてゆくのです。

七〇〇年の時を超えて熊野の人々が亡き親族の遺髪を納め続けてきた妙法山。そこは極楽浄土への入り口であると同時に、今を生きる人々



『那智参詣曼荼羅』（熊野那智大社蔵）。



写真②：紅葉の中のひとつ鐘。

の暮らしを見詰めながら護り続けてくださるご先祖様たちの眠る場所なのです。人の世に栄枯盛衰は付き物です。我が家が永遠に続く保証はありません。けれども妙法にお髪上げをすれば、必ず、ご先祖様たちみんなと一緒になるのです。

その大きな安心が妙法山のお髪上げというしきたりを支え続けています。

お髪上げのお参りの最後後に参拝者は境内のひとつ鐘という釣鐘（写真②）を一人一つずつ撞いていきます。

この鐘は亡者の熊野詣の最後に撞いてからあの世へ旅立つてゆくといわれる釣鐘です。参拝者は亡き人が無事極楽に行けるように、あるいは極楽に行つた親族に祈りをささげるためにこの鐘を撞きます。

現在、お髪上げに来られる範囲は和歌山県南部から三重県南部、つまり熊野地

方の方々ですが、三重県北牟婁郡には親族が亡くなつて四十九日が終わる頃、ひとつ鐘だけを撞きに来る地域があります。その地域では「ひとつ鐘を撞くと極楽への門が開く」と伝わっています。四十九日までは亡くなつた人は家にいるので、その後妙法山に亡き人と一緒に来て、極楽に送り出すのです。現在の釣鐘は延宝六年（一六七八年）再鋳と鐘に刻まれています。

### 熊野詣の本当の御利益

熊野詣の最も重要なことは、熊野へ歩く行程なのです。その昔、京都から熊野までの行程は三五〇キロを超えて、人によって大きく違うでしょうが、徒步では一五日から二〇日以上掛かっていたと考えられます。

熊野詣は現代のような単なる観光の旅ではありません。もちろん現代でも信仰から熊野にお参りする人はいます。ですが徒步で参詣した時代の人々は、信仰以上に我が身に降り掛かる不幸や苦しみに打ちひしがれ、熊野に参ることで神仏に救いを求めるところです。

友人と一緒に歩く山道の旅もあつたでしょう。最初はお互いの話をしながら、初めての熊野詣に心が躍ついたかもしません。ですが数日もすると話すこともなくなり、自然に自分と向き合つようになります。今までの悩みや苦しい

ことを考え、ひたすら自分の内面を見詰めます。

自分と向き合いながら無言で一步、一步と熊野に向かって歩を進めます。これは正に瞑想の世界なのです。

人は誰かに教えられた瞑想や座禅などはなかなか理解ができませんし、そのときは分かつたつもりでいても、それは頭の中だけの知識で終わることが多いでしょう。ですが自分自身で自然にその境地に入つたとき、人は納得できるのです。

そういう日々を何十日も続けながら、ようやく熊野にたどり着き、神である那智の滝に祈るのです。きっとそのときには、今まで苦しんできたこと、思い悩んで来たことも「何だ、大したことないじゃないか」と理解できる瞬間が必ずあつたでしょう。同時に長い旅を自分の足で歩いてきたのですから、身体の健康も保証されています。

そうやって心身ともに健康になつて、自分が暮らしに戻つていくのです。それが正に熊野詣がよみがえりの旅(再生の旅)といわれるゆえんです。もちろん道半ばで行き倒れた人も、帰りの道で倒れた人もいます。その大変な旅の行程を乗り越えられた人は、文字どおり蘇ったとでしよう。これが熊野詣における神仏から与えられる本当の御利益だと考えます。

最後に

鎌倉時代に法燈国師覚心が妙法山を西方極楽浄土への入り口と位置付け、念佛行を広めた頃、高野山に念佛行によって全国に勧進をして回つた高野聖がいたのと同じく、妙法山にも念佛聖の遊行者たちがいました。古代には死者の国であつた熊野も、熊野神道が確立してからは死者の信仰を中心にして妙法山とそこに住む念佛聖たちは那智山の中で異端視されるようになりました(『熊野詣 三山信仰と文化』五来重 講談社学術文庫、一〇〇四年、五八一五九。ページ参照)。

それでも妙法山の衆徒は死者(先人たち)への信仰を捨てず、念佛により日々死者の供養をしてきました。現在の妙法山もそれは同じです。

信仰心の有無は関係なく、我が身は必ず両親そして先祖がいるから存在します。そのことへの感謝と尊敬の念を忘れてはなりません。

人は必ず死を迎えます。

人としての命を受けて、それが一日で終わる人も一〇〇歳まで生きる人もいます。ですがそれは長い宇宙の時間の中では、どういとも同じ一刹那しかありません。

いたずらに死を恐れることなく、日々生がされていることに感謝して最後の日まで精一杯生き行こうと思います。

写真③：御影供本堂。



# 気付けば、そこに高密度

どうも隠されがちであったり、郊外へ追いやられがちな場所、墓地。ですが時折、静けさをたたえたその灰色が輝く瞬間もあるようで……

国道へとつながるいつもの角をぼんやり

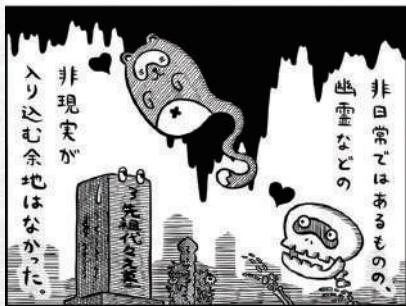
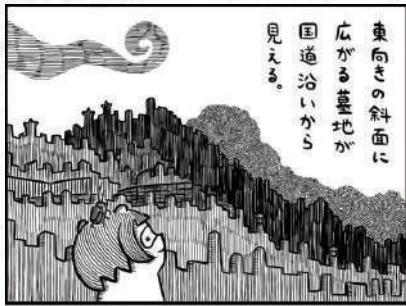
曲がり損ねた私は、少し先で同じように国道へと接続する道を見つけました。これ幸いと進む私の目に、国道に近付くにつれ、

何かが映り始めます。

見慣れた国道のその向こうに、風景に馴染まぬ灰色の小山……

それ以降、灰色はいつでも見えるようになります。気付いていなければ、全く見えなかつたというのに。まるでそれ 자체が幽霊かのような「高密度の墓地」が見えるのです……

文・イラスト たぬ屋



存在 자체は幽霊じみていたのに、中はきちんと管理され、「ゴミ」一つない素晴らしい晴らしさ。

おかしいのはその密度だけですが、場所が限られる現代においては、それも仕方のないことなのでしょう……

道はガクガク、段差もバラバラ。

それでも迷うことなく頂上まで歩を進められるのは、行き当たりばつたりに見えるこの設計が実は理にかなっているせいか、それとも、目に見えぬ誰かのお導きか……

灰色の直方体たちが無言で示す行く先を、

私はただただ辿るのみ。

先祖を祀る聖域のように捉えられることもあれば、魍魎の跋扈する不浄の地として扱われることもある墓地。

でも、それはきっとどちらも正しいので

しょう。淨と不淨、聖と邪が表裏一体のは、神様にはよくある性質ですから……

表面上、死後の世界との接点と受け止めがちなお墓。ですが、よく考えてみると、

その機能のすべては生きている我々の「精

神安定」につながっているのではないでし

ようか。

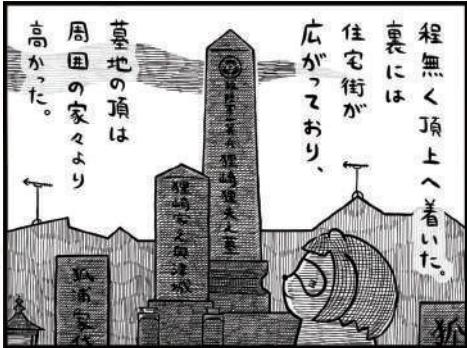
誰しも逃れえぬ「死」には心を乱されることがあります。

しかし、お盆やお彼岸のたびに「死」に触れ、「死」を思うことで、徐々に慣れ

てゆくことができるのかもしれません。

いずれ自分にその日が来ても、あまり怯えることがないように……

「気付けばそこに、高密度」おしまい。



でも、それは何となく分かる。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

ブサイク

だ。

でも、それは

何となく分かる。

のだ。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

ブサイク

だ。

でも、それは

何となく分かる。

のだ。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

ブサイク

だ。

でも、それは

何となく分かる。

のだ。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

ブサイク

だ。

でも、それは

何となく分かる。

のだ。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

ブサイク

だ。

でも、それは

何となく分かる。

のだ。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

だ。

でも、それは

何となく分かる。

のだ。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

ブサイク

だ。

でも、それは

何となく分かる。

のだ。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

ブサイク

だ。

でも、それは

何となく分かる。

のだ。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

だ。

でも、それは

何となく分かる。

のだ。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

ブサイク

だ。

でも、それは

何となく分かる。

のだ。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

ブサイク

だ。

でも、それは

何となく分かる。

のだ。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

だ。

でも、それは

何となく分かる。

のだ。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

ブサイク

だ。

でも、それは

何となく分かる。

のだ。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

ブサイク

だ。

でも、それは

何となく分かる。

のだ。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

だ。

でも、それは

何となく分かる。

のだ。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

ブサイク

だ。

でも、それは

何となく分かる。

のだ。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

ブサイク

だ。

でも、それは

何となく分かる。

のだ。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

だ。

でも、それは

何となく分かる。

のだ。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

ブサイク

だ。

でも、それは

何となく分かる。

のだ。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

ブサイク

だ。

でも、それは

何となく分かる。

のだ。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

だ。

でも、それは

何となく分かる。

のだ。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

ブサイク

だ。

でも、それは

何となく分かる。

のだ。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

ブサイク

だ。

でも、それは

何となく分かる。

のだ。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

だ。

でも、それは

何となく分かる。

のだ。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

ブサイク

だ。

でも、それは

何となく分かる。

のだ。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

ブサイク

だ。

でも、それは

何となく分かる。

のだ。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

だ。

でも、それは

何となく分かる。

のだ。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

ブサイク

だ。

でも、それは

何となく分かる。

のだ。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

ブサイク

だ。

でも、それは

何となく分かる。

のだ。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

だ。

でも、それは

何となく分かる。

のだ。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

ブサイク

だ。

でも、それは

何となく分かる。

のだ。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

ブサイク

だ。

でも、それは

何となく分かる。

のだ。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

だ。

でも、それは

何となく分かる。

のだ。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

ブサイク

だ。

でも、それは

何となく分かる。

のだ。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

ブサイク

だ。

でも、それは

何となく分かる。

のだ。

彼岸は

あいまいで

欲しい

ぶさいく

だ。

でも、それは

何となく分かる。

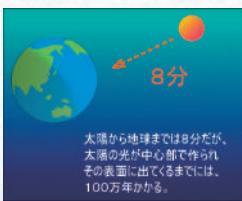
# テレポーテーション

テレポーテーションとは瞬間移動をいいます  
が、その「瞬間」とは、どれほどの時間経過を  
指すのでしょうか。

例えば、飲み屋にいたはずなのに、自宅に戻っ  
ていたというのは、周りの人たちにとつて、十  
分はた迷惑な瞬間の移動だったかもしれません。  
別の例として、東京・大阪間（約四〇〇キロメー  
トル）を一秒で移動できたとしても、光や電波  
の七五〇分の一の速度しかありません。これ  
を瞬間といってよいのでしょうか。

またとても速い光は、太陽から地球まで八分  
かかり、カップラーメン  
さえ少しデロデロになり  
かける八分を、瞬間とい  
つていいのか、悩むところです。

一般に物理の世界では  
光より速い物はなく、ど



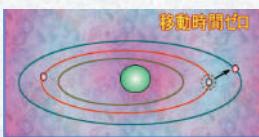
んなに速い乗り物から光を発射しても、光の速  
度は変わらないとされています。

そうした中、本当の瞬間移動は、もっと身近  
で起きてるようなのです。物質の元である原子  
では原子核の周りの一定の軌道上を電子が回っ  
ています。しかし電子が一つの軌道から別の軌  
道へ移動する時間がゼロらしく、つまり、あつ  
てはならない光以上のスピードが存在している  
ことになります。

そこでこれを移動とは考えず、消滅および出  
現と考えたらどうでしようか。

例えば、バチンコの玉を粘土に  
押し込むとします。この作業は  
どんなにゆっくり行つても、玉  
が周囲の空気中から完全に消え  
た瞬間に、粘土中に完全に出現  
したといえます。

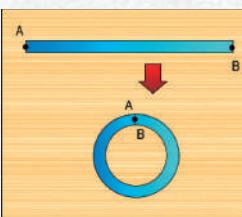
一方で重力（引力）というのは、



かかり、カップラーメン  
さえ少しデロデロになり  
かける八分を、瞬間とい  
つていいのか、悩むところです。

例えば、バチンコの玉を粘土に  
押し込むとします。この作業は  
どんなにゆっくり行つても、玉  
が周囲の空気中から完全に消え  
た瞬間に、粘土中に完全に出現  
したといえます。

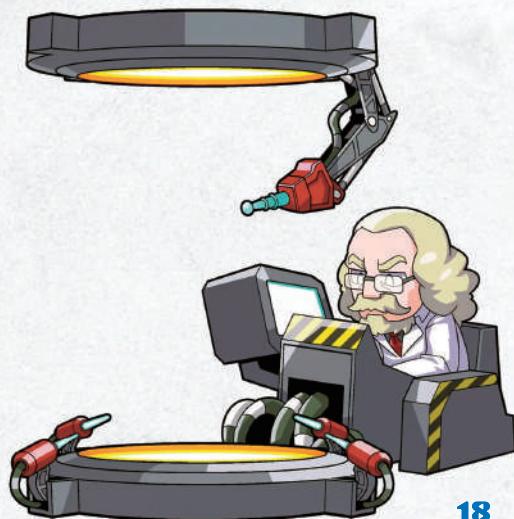
一方で重力（引力）というのは、



相互の距離が極めて短いとき、異常に強力とな  
り、空間を曲げることができます。そこで別の

場所なのに、隣接した場所と同等状態になるの  
かもしれません。別の言い方をすると、二点間  
の距離がゼロならば、物質の速度に関係なく瞬  
間移動が可能で、それには重力による空間の湾  
曲が必要となるわけです。

しかしこのような超  
微小な世界ではなく、  
私たちが普通に生活す  
るサイズの世界で、空  
間が曲がるほどの強い  
重力を発生させるには、  
ブラックホールが必要



となってしまいます。そのためには極めて大きなエネルギーが重要ですが、それよりも、もどと「そのもの」を送るのは、とても難しいことだと認識する必要があります。

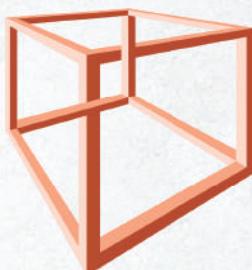
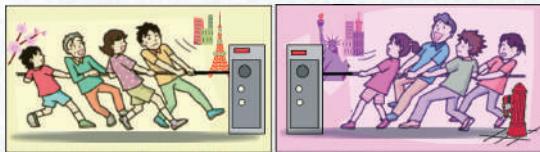
日頃使う電話やテレビというのは、実は画像(光)も音声も「そのもの」を伝えてるわけではありません。音声なら紙やフィルムなどの振動、画像なら色付き発光体の組み合わせであつて、本来私たちは、その情報以外何も送つてはいないのです。

そのものを送っているのは、宅配や郵便局やピザの出前の人たちです。つまりテレボーテーション以前にやるべきことは、物体の情報をよる伝送となりま——。そしてこれはかなり進んで、田



いって、田  
シーボ効果を演出することにより、匂つている  
と錯覚\*<sup>※</sup>させるのです。ただしこの方法は、見えたものに対する匂いの記憶がないと再現が難しく、匂いのエラーが起きることもあるでしょう。あるいは超音波で匂わせる技術なども面白そうです。

そうなった場合、火事や災害で避難する時などは別としで、あえて移動する意味が減少し、「テレボーテーション?」できなくつてもいいかななどと思うかもしれません。実際に現行の技術でも、太平洋をまたいでの日本腕相撲大会や、綱引き大会などは十分実行可能です。



※ 錯覚を起こすのは、頭が悪いからでも、頭がおかしいからでもなく、極めて自然な現象で、恥ずかしいことではありません。「自分は錯覚なんて起こさない」と思うのは、それ自体が錯覚です。詐欺師がいなくなるのは「自分はバカじゃないから、ダマされるはずがない」という、誰もが必ず持っている錯覚を、巧みに活用するからです。バカであるうとなからうと、錯覚がある限り、ダマしはなくなりません。

舍のお婆ちゃんやお爺ちゃんが、都会にいる孫をバーチャルに抱っこできる日は、もうすぐでしょう。そこでは重さだけでなく、柔らかさやぬくもりも感じ取れます。

ら日本へ、選手たちが全員瞬間移動したのと同じことが起こります。

最後に、超能力でもっとも問題となる点は、移動した先の条件でしょう。

移動先は空気なのか。空気ならばどう押しのけるのか。コンクリートならどう押しのけるのか。押しのけられたコンクリートは、その建築にどう影響するのか。

# ニセモノの心理学“食”

—

今道友昭

ニューヨーク市立大学准教授



食は生きるために欠かせない。そして食品によつては、より健康になり、より長生きできるとも思われている。逆に食品によつて、病氣になつたり、早死にしてしまうこともある。

(ニセモノの食べ物)とも言われている。ポーランは『雑食動物のジレンマ』や『食べ物を守るために』でその様なことを指摘している。

一方で健康志向の人も増えている。もちろん、健康志向といつても必ずしもそれが健康的だと

アメリカでは肥満率が高く(人口の48% WHO)、糖尿病や心臓病や癌のリスクは食生活に依存していると考えられている。アメリカの食生活といえばStandard American Diet(略してSAD(悲惨な)と引つ掛けて)いる。いわゆるファーストフード、具体的には超加工食品、砂糖、脂肪、ナトリウムが多い食品を指す。超加工食品は、実際何が入つていてるのか不明な場合が多い。内容表示はされていても、化学合成されたもので本来の食品から離れており、Fake Food

は言えない。アメリカの大手スーパーでは、健康を謳(うた)い文句にしている商品が多く、どういうところが健康的かという点で、中に何が入つているか、いかを宣伝している——無糖糖や無脂肪やゼロカロリー。しかし、食べる理由の一つは本来カロリーを取るためにあることを思えば皮肉である。砂糖、脂肪、カロリーはゼロではなくてもカットされているものが多い。その余りは豚を太らせるために使われた。

ではなぜスキムミルク(脱脂粉乳)と普通の牛乳(ホール・ミルク)の値段が変わらないのか。そ



ダイエットソーダや無脂肪や低脂肪牛乳にダイエット効果は見られない。特に無脂肪や低脂肪牛乳で肉食なのは、乳脂肪には栄養が多くそれを取り除いている。しかも味も見栄えも食感も劣るため、人工香料、着色料を加える。元はと言えば、スキムミルク(無脂肪牛乳)乳製品のために価値の高い乳脂肪取り除いた余りである。その余りは豚を太らせるために使われた。

ではなぜスキムミルク(脱脂粉乳)と普通の牛乳(ホール・ミルク)の値段が変わらないのか。そ

れはスキムミルクにもそれなりの工香、着色を加えなければならないため手がかかるからだ。

健康志向のスーパーに並んでいれば、ある程度健康的であると消費者は信じたい。しかしニセモノには注意を払わなければならぬ。乳製品そのものを避ける者もいる。中には乳糖不耐症の人もいれば、動物性食品そのものを否定している者もいる。いわゆるビーガン。理由は必ずしも健康視点からではなく、環境や社会、動物愛護の視点による。

ともかく、健康志向のスーパーではそのようなニーズに応えるため、乳糖不使用（植物性由来）の食品を多く並べている。それはそれでよいが、乳製品を好むなら、気を付けなければならぬことがある。それは普通の乳製品のようだが、実際食べると違和感があり、よく見ると乳糖不使用とある。雑食動物（Omni-vore/ 何でも食べる人）としては騙された、ニセモノを買ってしまった気分になる。

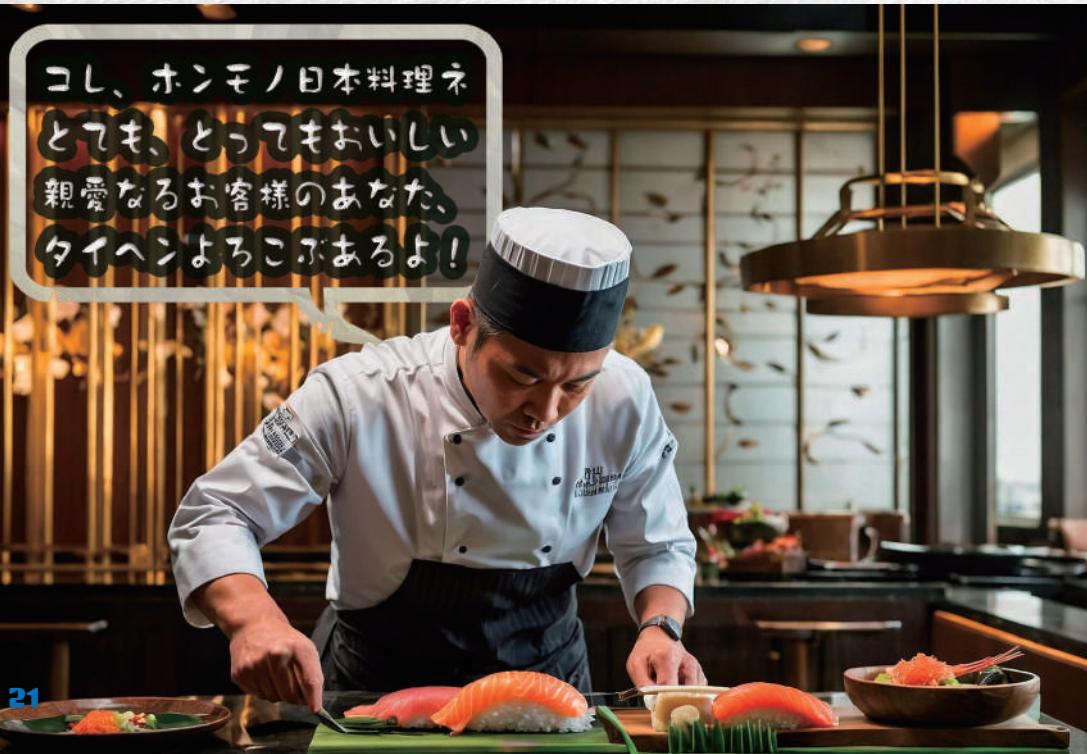
一部のビーガンが未練がましく動物性食品にこだわっているように思われるのは、動物性食品を意識した食品やメニュー項目——まるでオヤジギャグのしゃれの連発——豆腐でイメージしたトファーキー（Tofurkey）、

ミートボールをウイート（小麦）でイメージしたウイートボール（Wheatballs）。

ビーガンの友人は盛んに「肉みたいだ、肉みたいでしよう」とニセモノの肉（フェイクミート）を喜ぶ。こつちとしては別に肉みたいじやなくていいんだよ、美味しければ……。しかも肉に似せるために相当加工したのではないかと思ってしまう。

植物性だからといって必ずしも健康的で、環境、社会、動物に優しいとは言えない。植物性食品や製品大量生産のために森林伐採など、

環境破壊で多くの人も動物も苦しめられる。だから全ての植物性食品を受け入れ全ての動物性食品を否定する必要はないと考える健康志向の人もいる。「健康的で長生きする人々の食生活を



真似ればいい！」

日本人は健康的で長寿のイメージがある。(日本肥満率は5%未満、そして84歳の平均寿命はアメリカより5年長い[WHO])。アメリカで日本料理が流行っている理由は健康的であるからでもある。ただし、日本料理といつても日本の日本料理とはまた別の食べ物として考えた方がよいかかもしれない。なぜならば日本料理といつても必ずしも日本人が調理しているわけではなく、アメリカ人の好みやトレンドに合わせることが多いからである。

それはそれでなかなかの面白味がある。しかしながら、このレストランは美味しい、本場に近い、と、まるで舌が凝っているような言い方をされる。自分が美味しいと思う、イコール本場に近いという確信を持つているようである。

外国人が勧める日本食には注意が必要だ。店員に日本語で話してみてつて言われても、アジア系だからといつても日本人で、日本語を話すとは限らない。特に店員同士が中国語で話していれば、日本人である可能性は極めて低い。

注文時にメニューの「Una-ju」を「饅重」と発音したら、店員に「ウナユー」と直されてしまつた……。

印象深いのはスイスのベルンにある日本料理屋“Umami”。感じの良いアーフリカ系店員はドイツ語をしゃべらず英語で通す。

そして、いきなり日本語で「イタダキマス」と言われた。ドイツ語圏で食事前に言うGuten Appetit!（食欲がありますよう）＝召し上がりください）のつもりなのだろう。

料理も驚きの発想。Katsu-donはショニッツェルの下にオムレツがあり、さらにその下にタイ米。日本のカツ丼のイメージからは程遠いが、同じものを期待すべきではなく、Japanese Inspired Katsu-don（日本料理に刺激されたカツ丼）として楽しむべきかもしれない。ちなみにラーメンには塩辛いスープの上にベーコンが乗つており、なかなかのイス風を感じさせた。

驚いたのは、そのレストランのネット評価にあつた幾つかの「本場（Authentic）」というコメント。これが本場に近いとすれば、オーセンティック評価のないレストランのカツ丼はどんなカツ丼なんのだろう？

かなりグローバルなポストモダンの体験であつた。残念ながらそれはそれなりにお勘定にも反映されていた。

今では日本食とされていても海外生まれの物も多い。個人的な意見かもしれないが、海外か

ら刺激を受けた日本食は本場より美味しく感じられる場合が多い。ユーハイムのバウムクーヘンはベルリンの専門店のものよりおいしい。ただBaumkuchenとバウムクーヘンは別物と考えるべきかもしれない。

（いまみち・ともあき 環境心理学）



今道友昭（いまみち・ともあき）  
ニューヨーク市立大学のラガーディア・コミュニティ・カレッジと大学院の心理学准教授。ニューヨーク市立大学大学院で環境心理学の博士号を取得。批判心理学、環境と健康と社会正義と持続可能性の関わり、日常生活環境の現象学的アプローチと存在様式などが興味分野。ニューヨークマラソンを2時間58分で完走。

[https://lagcc-cuny.digication.com/tomo\\_imamichi/Welcome/](https://lagcc-cuny.digication.com/tomo_imamichi/Welcome/)

# 妖怪つてなんなんだ

文・画 綺蝶レナ

Lena Kichio



私は幼少期から妖怪が好きで、描きためた妖怪

怪画を披露するため、数年前から個展やギャラリー展を開催している。

今回は大好きな「妖」についてつづらせてもらおう。せっかくの機会なので、諸君も妖怪を通して日常の不思議や面白さを再考してほしい。

のかなんて分からぬほどだ。

江戸時代の妖怪作家といえば、鳥山石燕(とりやませきえん)をはじめ葛飾北斎(かつしかほくさい)、歌川国芳(うきがわくによし)が有名なものだつたの

彼らを魅了した「妖怪」はどんなものだつたのだろうか。

妖怪はときに神であり、ときに災いをもたらす怪物であり、ときに未確認生物である。学校

では、よく七不思議や怪談などが語られていたと思う。私は小学生の頃、テレビで『ゲゲゲの鬼太郎』や怪談話のアニメなどもよく見ていた。トイレスの花子さんや口裂け女、コックリさんなど。そういうのが昔から大好きで、図書室で読みあさつては、遅くまで学校に残り、何か現れはしないかと待っていたのだ。

科学者は「妖怪なんていない」と言う。それも分かる。妖怪がもし姿を見せて存在を示してくれたら大発見であり、医療分野で何か役立つかもしれない。だがいつなれども妖怪は浪漫であり、空想のような存在なのだ。

神を目撃して、存在の証拠を残した人間はあるのだろうか。同じようなことだと思う。仮に証拠を押さえ、研究機関が調べたなら、それは生物あるいは科学的現象とみなされ、ファンタジーではなくなるだろう。UFOだってそうだ。現実なのか空想なのか分からなかつたものが科

「妖」の語源（文字の成り立ち）についてご存知だろうか。人に天だ。これは両手をしなやかに重ねてひざまずく女性と若い巫女がしなやかに身をくねらせ神を招く舞をしている様子が妖艶だからという理由で付けられたとされる。それが「妖」なのだと。

日本で有名な妖怪は「雪女」や「ぬらりひよん」、「猫娘」あたりだろうか。妖怪が何種類いる



「ぬらりひよん」  
鳥山石燕『画図百鬼夜行』(1776年)。



「お岩さん」  
北斎『百物語』(1831-1832年頃)。

学の力で次第に解き明かされつつある。

ここで二種類の妖怪について紹介し、考察していくこ

うと思う。

## ツチノコ

ツチノコは一七〇〇年代

に目撃された太い蛇のよう

な存在であり、日本の妖怪

であり、北海道と南西諸島

を除く全ての場所で多数の

目撃情報がある。鳴き声を

上げたり、日本酒が好きだ

ったり、高く跳ねたり、と

てもユニークな妖怪だが害

はなさそうだ。

ヘビや新種のトカゲとい

う説もあるが、私は新種の

生き物か、メキシコサンシ

ヨウウオの仲間ウーパール

ーパー（メキシコサラマンダ

ー）ではないかと思つてい

る。

水の生き物？ と思つた

キミ、正解だ。だが陸化す



新作レポート

ることもあり、色が黒くサイズは25~30センチ・メートルほどで、ずんぐりむつくりした外見である。是非諸君も調べてみてほしい。

ちなみに日本版ウーパーラーパーが発見されたのは一九二四年で北海道だというから不正解かもしれない。不思議な伝説である。なぜなら

ツチノコの目撃情報は北海道にはないからだ。

ウーパーラーパーと判明したからなのか、そう

でないからなのか。真相は謎だ。

## すねこすり

すねこすりは岡山県に伝わる妖怪（一九三五年の記録）で、その名のとおり、人間の脛を擦る妖怪だ。犬のような（恐らく小型犬くらいの大きさ）

姿で、雨の日の夜に両足の間をすり抜けるとい

う逸話がある。ただすり抜けるだけで、かみ付

いたり、呪つたりはしない。ビジュアルも可愛

く、『ゲゲゲの鬼太郎』にも登場するマスコット

的な妖怪といえる。私が出会ったのは『妖怪大

戦争』という映画で、神木隆之介さんが演じる主人公の相棒的ポジションの妖怪だった。

すねこすりはモルモットなのでは？

そこでモルモットの起源を調べてみた。モルモットは日本が鎖国中に渡米したらしく、一八四三年と記載があった。そこから推測するに、

当時、恐らく外来動物についてあまり知られて

おらず、見たこともない猫や犬のようなものが雨の夜、しかも視野が悪いとき股をくぐり抜けるなんて恐ろしくてたまらなかつたのだろう。

けれどモルモットは寒い場所を嫌い、昼行性なので、本来なら夜は寝ていると思われる。

すると雨の夜に現れた理由は、暖を求めた、あるいは傘をさす人に近づき、雨を避けたかった、あるいは雨が怖くておびえていたところに人が現れ、困惑して足の間を駆け回った、などではないかと個人的に考えた。真相は分からぬ。江戸時代の書物や伝承はあくまで記述であり、写真などがないため、信頼度一〇〇パーセントとはいえないからである。しかしだからこそ妖怪には浪漫があり、人に夢を与えるのだろう。



綺蝶レナ (きちょう・れな)  
沖縄県出身のマルチ・タレント。  
ライブやステージ・シンガーのほか、  
ライター、妖怪をメインの画家としても  
活動中。



何かあると、人々は神頼みをする。パンデミックに見舞われたとき、アマビエやアマビコの絵を描いたり、購入して部屋に飾つたり、持ち歩いたりする人もいた。まるで江戸時代に戻ったように感じた。

ときに神になる妖怪は、我々の生活のどこかに溶け込んでいて、日本人の歴史に名を記し続けていると思う。

妖艶な怪物で「妖怪」、よいではないか。大人子供関係なく妖に惑う。それがジャバニーズ・スタイル。トラディショナルなサブカルチャー。唯一無二の文化。私はこれからも妖怪とともに生きていきたい。

# 詩人 水原昇 中編

ムネーモシユネーの会・主宰 みむらりえ

## 中口上

編集隊長から、今号のお題は「水原昇の後編です」というメールが届いたのは、夏の初めの頃だった。

……！ そうだった、そうだった。

……！ そうだったが、前号で水原昇について何を書こうと思っていたのか、きれいさっぱり忘れてしまつた。

「きれいさっぱり」なので、思い出すこともできない。

……困ったなあ。

……仕方ない、いつものように頭の準備体操

を兼ねて、今道センセイについて思い出したことがあるので、そのことからまず記してみよう。

ブの先に刻み込んだドイツの老舗ブランドの万年筆のことである。

センセイのお気に入りの万年筆のインクの色はブルーブラックだつた。

インクカートリッジにインクを詰めればよいはずなのだが、手が汚れるからか、面倒なのがわからないが、ブルーブラックのインク瓶に直接万年筆のペン先を浸して文字を書いていらした姿が懐かしい。

いや、万年筆をお使いになるときはいつも指先をインクで染めていらしたので、「手が汚れるから」という理由は違うなあ。やはり面倒だったのだろうか。

もちろん甘いものは、モンブランケーキに限らずお好きだったが、私が言つてるのは、「ホワイトスター」と呼ばれるロゴマークをキャッ

いつだつたか、今は滅びてしまつたが、兵庫県の尼崎にあつた小さな大学の大学院での講義のとき、「私は万年筆をよく使うのですが、吸い取り紙が手に入りにくくなつてしまつた」。

「近所の文房具屋ではもう売られなくなつて困つています」と丁寧な口調でポロリと愚痴をこぼされたことがあつた。

すると次の週の講義では、学生のひとりが吸い取り紙をあちこち探し回つて買い求め、センセイに届けて下さつた。

この思いがけない厚意にセンセイが感激されたのは言うまでもない。尼崎の大学では、センセイを尊崇する学生や聴講生が多かつたので、センセイはいつも大事にされていた。そういうこともあつて、八十歳を過ぎても毎週、東京から尼崎まで通つていらしたのだと思う。

※ ※ ※

センセイは万年筆をいつたい何本持つていらしたのだろうか？

一本や二本ではなかつたはずだ。晩年の信楽のタヌキ体型（センセイごめんなさい）の頃のセンセイの手は、しわ一つない、赤ちゃんのようなブクブクしたふくよかな手であつたので、その手で握りやすい、太軸の、そしてベン先も大きいモンブランを好んで使つていらした。

細いベン先のものも持つていらしたような気がする。

絶対に万年筆でないと文字は書かない、というような意固地なところもまつたくなく、三色ボールペンも使われることもあつたし、「今年の正月は毛筆で書き初めをしました」とおしゃつていらしたこともあつた。

あるとき、たぶん七十年代の最後の頃だつたと

思うが、大阪にモンブランの直営店はあるか、とセンセイが私に尋ねられた。よくよく聞いてみると、尼崎の大学に来るときくらいしか、モンブランのお店に足を運ぶ時間を持つことができないので行つてみたい、ということであつた。

……なぜ行きたいのか？

センセイいわく「私の今使つてゐる万年筆がバカなヤツでね、自殺しおつた」。

……は？ 自殺？

センセイ続けていわく「大切にしてやつていたのに、床めがけて飛び降りてね。おかげでペン先がつぶれてしまつた」。

……？

一本や二本ではなかつたはずだ。晩年の信楽のタヌキ体型（センセイごめんなさい）の頃のセンセイの手は、しわ一つない、赤ちゃんのようなブクブクしたふくよかな手であつたので、その手で握りやすい、太軸の、そしてベン先も太いモンブランを好んで使つていらした。

困りですね」とにつこり微笑んで返しておいた。私がまだセンセイの前でネコを三匹も四匹も被つていた平和な頃のことである。

大阪のモンブラン直営店は、奥行きがあつて、静かで、嚴かな雰囲気すら感じられたが、そんな高級なお店に入つたことがなかつたので、私はドキドキしながら、おとなしくしてゐた。

センセイはといえば、何本かの万年筆の試し書きをされていた。

「これは書きやすい」とか「これは少し引っかかるような書き心地だ」とか、そういうような感想を交えながら、一本、一本、入念に、そして楽しそうに試し書きをされていた。

その中に、私にはうまく説明できないのが残念だが、贅沢なデザインのほどこされた金色の万年筆があつた。

女性の店員さんが説明するところによると、特別限定モデルで、ショパンをイメージしてデザインされたものだつた……と思う。

私のかすかな記憶なのであてにならないが、値段を聞いてため息が出たことだけはよく覚えている。

センセイは、金色の万年筆を手に取つては置き、また手に取つては置きという動作をを何度も繰り返し、迷いに迷つてこの限定モデルを購入された。

嬉しそうに金色の万年筆で文字を書いていらまで出かかつた言葉を飲み込んで、「それはお

つしやつたが、一ヶ月も立たないうちに、この万年筆も床めがけてダイブしたらしい。

みごとに変形した18Kのペン先を、修繕することなくセンセイは、しばらくその万年筆を使つていらしたが、あの万年筆は、今、どこにあるのでだろうか？

※※※

万年筆購入の話は、十年、いや、もう二十年以上も前の話なので、記憶が断片的でおぼろげなのだが、その頃は、大阪の心斎橋というところにモンブランの直営店があった。

おそらく今はもうその店はないと思うが、どうやつてその店まで行つたのだろうか、と胸に手をあてて問つてみた。

……地下鉄！

東京から新幹線でいらっしゃるセンセイと新大阪の駅で待ち合わせたときに、「ほんとうに地下鉄にお乗りになりますか？」と念を押した

ようなかすかな記憶がよみがえる。

ふだんセンセイは新幹線のような長距離列車以外は鉄道を使うことはほんなく、タクシーでの移動が常であつたようだ。そのセンセイが、なじみの薄い大阪で、今や大阪メトロと名前を変えたらしい当時の市営地下鉄に乗車された。

……ホントかな？

……私の夢ではないだろうか？

何度も何度も自問自答してみる。

地下鉄の駅構内を歩いた記憶はないが、車両内でセンセイに空いている席を勧めたら首を横に振つて無言で拒否された姿が浮かんでくる。

何よりも、センセイが地下鉄の中でおつしやつた言葉が今も時折思い出されるのだ。

……「あれは間違つている！」……

※※※

「あれは間違つている！」とセンセイが小さな声で、しかしきつぱりと私にささやかれたのは、地下鉄の車両の中に貼られた広告を見てのことであつた。

「あれ」という言葉が指している方向に目をやると、そこには「痴漢は犯罪です」という太い文字があつた。

……ん？

……間違つてているとは？

「痴漢は犯罪じゃなくて、犯罪者です」というセンセイの声が聞こえた。

なるほど、確かに「漢」というのは、「熱血漢」や「無頼漢」「門外漢」「巨漢」「暴漢」というようく使われる場合は、人を意味する。「痴漢」も然りである。

「……犯罪じやなくて、犯罪者です」というセンセイの声は少し怒つていたような気がする。きっと言葉が不正確に用いられることが、センセイにとつては我慢のならないことだったのだろう。

センセイがいかに言葉を正確にとらえるか、

言葉を使う人に正確さを求めるか、ということの例は、以前『星座』という雑誌に書いたことがあるので、ここで重複することは避けるが、そういう言葉に厳格なセンセイのペインネームの一つが「水原昇」であった。

……ああ、これでやつと話が「水原昇」に戻つてきた。

※※※

センセイのペインネームの一つが「水原昇」であつた、と記したが、センセイに倣つて正確に述べるなら、詩を生み出す際のペインネームが「水原昇」であつた。

……否……単なるペインネームではないのだ。先生の分身……否、否……分身とも違う。

孫悟空が、自分の毛を引っ抜いて、ふつと息を吹きかけると、その毛の数だけ孫悟空が現れる、というおとぎ話を子供の頃に読んだが、そのたくさん現れた孫悟空が「分身」であり、それら分身はすべて本人の属性を備えているわ

けだが、水原昇は、まったくセンセイの属性を引き継いでいない。独立した別人格なのである。

※ ※ ※

私がセンセイから水原昇を紹介されたのは、万年筆を買いにでかけるよりも前のことだったと思う。

「君はこの詩人を知っていますか？」とおつしやりながら、掌に収まるサイズの豆本を見せてくださった。

その豆本の背に刻まれた詩人の名が「水原昇」であり、これが私と水原昇との出会いであった。

初めて聞く名前であり、「知っていますか」

と尋ねられることもあり、まさか水原昇がセンセイだとは夢にも思わず、パリで暮らす詩人と紹介されて、「へえ、パリかあ。おしゃれだなあ」

と水原昇の人物像を頭の中に描いていた。

ステッキ片手にパリの街を散歩するスラつと

した紳士……ああ、何たる不覚！

「この本をあげるから読んでみなさい」とセンセイに勧められ、センセイが書いたとは露知らず、水原昇の詩を読んでみた。

……難しい！ でも言葉が美しい！

……そういえば、水原の正体を知らずに、センセイの前で、水原昇のことをよく褒めていた。

ちょうど今から二〇年前、雑誌『ムネーモシユネー』の二〇〇四年冬号で、私は水原昇を絶賛

している。

その一部を紹介すると、こうである。

（前略）水原昇という詩人は、現代詩人の中では、藤川正夫と並んで私の好きな詩人だが、私にはとうてい太刀打ちできない。

太刀打ちできないとはどういうことか。それはつまり、この詩人の詩や歌に込められた深い思いを本当に理解しているだらうかと、しばしば不安になるのである。時に哲学者を思わせるこのすばらしい詩人の作品を、絵本しか読めないような子供が何もわからずに眺めているだけのようだ、鑑賞とはとても言えない読み方しかできていないような気がしてならない。（後略）

ああ、ああ、何たる不覚！  
それにしてもセンセイは、水原昇が褒められることをどう思っていたのだろうか。

先にも述べたが、センセイの分身が水原昇なのでなく、センセイと水原は別人格である。

私も一年ほど、いやもつと長い間だったかもしれないが、水原昇はセンセイの「ご友人」だと信じて疑わなかつた。まんまとセンセイに騙されていたわけだ。

……悔しい！

今思い出して悔しいので、頭を冷やすためにこの続きを次号へ。

「後編」のはずが「中編」になつてしまい、編集隊長の呆れた顔が目に浮かぶが、ちょうど紙面も尽きたので、お許しください。



# 世にも不思議な死語の世界

編集隊長  
瀬 賢

## 死語辞典



上司と  
おどろくほど  
心がかよう!

【難解】死語辞典、  
宝島社、2014年。

前提として、言語は死なない、古代ギリシャの神々も死なない、魂も不死である。理由は、どれも生き物ではないからだ。生きていらない存在は、死ねない。これはサザエさんやドラエモンが死ないのと同じ理屈だ。つまり「死語」は比喩表現でしかない。例えば「ギリシャ古典は偉大で、その言葉は今日も確実に生きており、よき人生の道しるべとなり、現代社会を生き抜くヒントを与えてくれよう」などというありがちにしてやや平和ボケしたポエムな比喩表現（時代背景も作家の意図も完全に無視したオレオレ勝手読み）もある（けれどそれはそれで大変面白い）。

死の定義は難しいが、心停止後、常温でその辺に放置しておけば、腐敗して朽ち果てていくような状態になることだ。宗教によつては、教祖が死後、復活したとされるが、そもそも復活できない状態になるのが死なので（幽靈は除く）、

（時代背景も作家の意図も完全に無視したオレオレ死語）もある（けれどそれはそれで大変面白い）。死語をそれらしく定義すれば、どの言語共同の母語でもなくなり、今では二ツ三な趣味の世界、マニアックな場でのみ扱われ、日常生活では、ほぼほぼ知られず、忘れ去られた言語である。意識高い系マウント気質の人間なら、学習しているだけで、そこそここの優越感に浸れるかもしれない微妙な高尚さをも含ませ持つ。

例、ラテン語は死語、ギリシャ語は非死語。財政が破綻しようが、国として存続し、今もギリシャ語が使われている以上、死語ではない。古代ギリシャ語は死語だというが、古英語は死語だとはあまり言われない。言語的にある瞬間で古代が終わつて次の瞬間から中世だとは言え

科学的には正しくない。ホントに復活したのなら、仮死状態とか臨死状態からの生還（お目覚め）だ。とはいってもオッケーなので、奇跡としての復活信仰に異論はない。

いただきマンモス、社会の窓、冗談はよしこちゃん、バッヂグー、マンモスうれピー、許してちょんまげ、チョベリグ、永久就職、ジャケ買い、飲みニケーション、といった列举するもアホらしく、しかしある意味、難解な類の語句（死語）は上段の図書に譲り、以下、滅びた言語（いわゆる死語）について考えたい。

死語をそれらしく定義すれば、どの言語共同



大雑把には、ギリシャ語が多くの方言から統一されていったのに対し、ラテン語は標準語が好き勝手に方言化していく。ローマ帝国がデカすぎたためなのだろうが、方言は、フランス語やイタリア語やスペイン語やポルトガル語やルーマニア語や……、となつて国家の母国語として生きている。ラテン語は死んだ。ローマが滅び、現在どの国家や共同体の母語でもないからである。イスラエルのようにローマが再建され、ラテン語が母国語になれば、教祖のことく復活を遂げることになる。信仰とポエムな比喩表現に差異があるのか、ないのかは不明だが。

# PHILOCULTURES

第13回

ブルクリトウードー・スプレンドル

## 美は輝きだ



はんにゃ  
般若——鬼がつなぐ東西の教え

演 賢  
編集長

含め「私は誰? しょせん

人間、エラそーにすな、神

じやない、いざれ死ぬ(メ

メントー・モリー)、今を楽しもう」という辺りだ。

もちろん「自分探し(の旅)」などという訳の分からん感傷的世界とは無縁である。

この格言の元の言葉は、左図(一、二世紀頃の

ある邸宅の床にはめ込まれていたモザイク画、今はローマ国立博物館所蔵)お骨人の下方にある「グ

ノーティ(知れ)・サウトン(君自身を)」。奇才ペトローニウスの言うとおりで、深淵な意味などない(深淵なのは日本語訳文の響きだけ)。

プロトーン(ソクラテス)やキケローは話をややこしくしたがるので放っておこう。

しかしプログノーティのままでは「予め知つておけ」という、昨今ではパワーハラと非難されかねない命令調だ。なので名詞化しようとすると、プログノーシス。

以上、要するに言いたいのは、競走馬プログノーシスを漢字で表せば、般若だということにほかなりらないとしか言わざるを

えないのであるう!

※同語族

インド・ヨーロッパ語族(印歐語族)である。メジャーナ言語の多くが属する(同じ祖先から方言化して別れ、そこからさらに方言化した)→難。注意

点は、ペルシャ語は属するが、アラビア語は属さない。ヒッタイト語は属するが、アッカド語、シムメール語は属さないなど



↑ ΓΝΩΘΙ(グノーティ)前方にΠΡΟ(プロ)を付けければΠΡΟΓΝΩΘΙ(プログノーティ)。  
般若。



サウトンを無視して、上コラムサンスクリットの「プロー」と同語源のギリシャ語「プロー(予め)」を付ければ、プログノーティになる(ギリシャ語もサンスクリット語も同語族)。よくよく考えれば、グノーティもプログノーティも意味に大差はない。あつたところで、主観的、個人的な思い、好み、願望の範囲内だ。

源のギリシャ語「プロー(予め)」を付ければ、プログノーティになる(ギリシャ語もサンスクリット語も同語族)。よくよく考えれば、グノーティもプログノーティも意味に大差はない。あつたところで、主観的、個人的な思い、好み、願望の範囲内だ。



■編集長 演賢(hamacken)

■@iazoya

OMNIA VINCIMVS FRVCTV INTER FOLIVM VERO!

①似たような例としては、文語訳聖書の「我は有て在る者なり」(出・三・一四。ヘブライ語+ギリシャ語+ラテン語→日本語と徐々に中一病)が進行している。翻訳者のNo More Blues (Chega de Saudade), 鳴思荒く原文を乗つ取ってしまったというか……。訳者に一言、「お前の著作ではない!」。

■フィロカル 第13号(2024年秋)

■発行所 哲学文化塾(今道友信記念文庫)

■企画編集 ピナケス出版有限公司

■制作協力 ムネーモシュナーの会

大異山高德院清淨泉寺

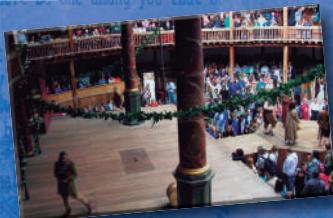
日美学園日本美容専門学校

# シェイクスピアの時と 我々の時

茅野友子 著



シェイクスピアの時と我々の時 茅野友子  
46判・上製・264頁・縦組 本体2,400円+税  
ISBN978-4-903505-20-6 C1090



茅野友子(ちの・ともこ) 国際基督教大学人文科学科卒業、同大学院修士課程修了。カリフォルニア大学アーバイン校英・比較文学科博士課程修了、博士(英文学)、立教女学院、東京女子大学、カリフォルニア大学アーバイン校講師、米ハンティントン図書館研究員を経て、元姫路獨協大学教授、英文学研究(主としてルネサンス期)、比較文学、日英比較研究。1997年、カリフォルニア大学アーバイン校学長賞受賞。◎著書:『仕える婦人達——忍耐の伝統とグリセルダ伝説』(英文・ミシガン、1989年)、『国際化時代の日本語』(大学教育出版、2000年)。◎編著:『バストラル——牧歌の源流と展開——』(ピナケス出版、2013年)、『古代ギリシアの女性像—女神から娼婦まで—』(ペディラヴィウム会、1980年)。◎共著:『英文学と聖書をめぐって』(ペディラヴィウム会、1982年)、『ことばから人間を』(昭和堂、1998年)。

Edit the Tomorrow!  
Pinakes